

二体のアプロディテ (2)

浜 下 昌 宏

[3. プラトニズムの伝統における「二体のアプロディテ」解釈]

[A. プロチノス]

プラトンの教説のうち、後世の哲学史に影響を与えた最大のもののひとつは、いうまでもなくイデア論である。しかもそれは、「分有」「離在」といった述語を使っただけでなく、その論理的構造を明快に定式化し説明するという思索的営為のみならず、イデアに近付くための精神の修業を要求することもまた、教説の重要な側面であった。イデア論の構造のいっそうの論理的・体系的解明が、新プラトン派に課せられた課題であった。それゆえ、プロチノスが寓意的にアプロディテのイメージに託して何ごとかを論ずるにおいても、プラトニズム的にその含意するところを、我々は看過することのないように注意する必要がある。ところが、『エネアデス』を読むかぎりでは、なぜかプロチノスはアプロディテのみならず、神話的形象をさほど寓意的に生かしているようには思われない。たしかに、ロゴスの道に徹底して、ミュートス的な論法には特色を見せないプロチノスであるから、二体のアプロディテについても、プラトンの『饗宴』への参照ゆえに言及されているにすぎないかのようである。

プラトンの亡き後約 600 年後の紀元 3 世紀の哲学者プロチノスによる二体のアプロディテ解釈は、『エネアデス』III, 5、「エロスについて」において見られる。そこでは本論文の前回分でふれた、プラトン『饗宴』での議論を踏襲してはいるが、上述のように、なにゆえにこの寓意を彼の思想体系との関連で取り上げたのかいささか不明である。この寓意の議論に対するプロチノスの熱意は文面からは伝わってこないように思われる。なぜなら、Armstrong の言うよう

に [Plotinus III, trans. and introduction by A.H. Armstrong, Loeb Classical Library, p. 164]、アプロディテの父がウラノスであれ、クロノスであれ、はたまたゼウスであろうとかまわぬふうであり (第2章、第8章)、さらに、ゼウスの妻のヘラと同一視すら示唆している (第8章)。とはいえ、アプロディテ・ウラニアについては、彼の教説の中に生かそうとする試みは明らかに見て取れる。その点に注目しながらプロチノスのアプロディテ論を読むことにしよう。

プロチノスの主題は、プラトン『饗宴』と同様、エロスであって、その関係でアプロディテに言及されている。第2章で彼もまたアプロディテが二様に (ditten) 存在することを議論として取り上げる。まず、ウラノスの子供であるアプロディテ・ウラニア [以下、AU と略記] は、母なくして生まれた女神であり、天上には (en ourano) 結婚がないゆえに、このアプロディテは結婚とは無関係である。この「結婚」(gamoí < gamos) という視点はプラトン『饗宴』にはなかったものである。それに対してアプロディテ・パンデモス [以下、AP と略記] は結婚の守り神 (ephoron gamon) とされる。「結婚」という徴表は、たしかに AP の世俗的性格を際立たせてはいる。しかし同時に、プロチノスの含みでは、AP の劣性を意味していると考えられる。たとえば、『エネアデス』VI, 9、「善なるもの一なるもの」で論じられているアプロディテ論を見てみよう。その9章において、魂 (psychē) が彼岸の天上世界にある場合と、此岸とにある場合とに区別して、次のように語られている。魂は神 (=一者) から発出したものとして、神への愛情を抱くのは「あたかもよき娘がよき父に対して美しい愛情を寄せるような」必然的なことであり、そうした魂の寓意としてのアプロディテは、天上世界では天 (Uranos) の一族として純粹さを保っている。ところが、地上に降りて生成世界の世俗のアプロディテとなると、「誰かれの区別のない娼婦の性質」を發揮し、「求婚者の誘惑に欺かれる」。そしてその結果、父を見捨ててもうひとつのはかない愛欲におぼれるようになる。尤も、地上的愛欲に倦み疲れると、魂は世俗から自己を清めて、再び父のもとに身を寄せようとするのだが。——ここで見られる論法も、純粹発出 (emanatio) と回歸

(remeatio) の弁証法であるが、その背後にある、世俗的な結婚に対する劣等視は明瞭である。

さて、「エロスについて」に戻ると、さらに AU は、ヘシオドスによる系譜と異なり、クロノスの娘ともされている。そしてプロチノスの寓意では、クロノスは知性 (nous) を示す。知性から直接生まれたものは地上的・質量的なものには与らないゆえに、そこで AU は、出生からして汚れのない知性から直接汚れのないものとして生まれ、たえず天上世界に留まっていて感性界には降りてこないで、その純粹知性的性格ゆえに最も神々しい魂とされる。つまり、母なしで生まれたということは、質量・物質には与らず感性界から離れた真実在 (ousia) としての AU を性格づけている。AU を「もっとも神的な魂」(psychen thei otaten) と呼ぶ。——こうして、神、知性、魂という、プロチノスの序列におけるアプロディテの位置が確定される。そして、エロスは、魂から生まれ、善を恋いこがれる魂の活動・働き (energeia) を意味する。そのような AU に関係するエロスについての説明を整理しておこう。

プロチノスによれば、AU はクロノスに働きかけて真実在としてのエロスをつくる。そして AU はそのエロスと共に知性 (=クロノス) の方向を見据える。エロスの働きとは、自分以外のすべての美しい者に惹かれることであり、恋する者と恋い慕われる者との仲介者の役割をする。エロス自身は恋するのではなく、恋する者のいわば「目」として、恋する者がエロスを通じて慕っている相手を見るようにする、いわば恋の導きをする。その際エロスは恋し合う者たちより先にいて恋の対象を、そして恋の様子を眺める。つまり、エロスは見ることを楽しむのである。ここで言う「見る」とは、知覚・視覚によるのではなく知性による直観を意味し、また活動によるのではなく距離を持った観想として、本質を捉えることを指す。すなわち、見る (theoria=contemplatio) の基本的な意味は、自らが活動の中で対象に関わって対象を知るのではなく、対象との距離を確定した上で対象の本質を理解しようとすることである。こうして、恋の有り様を見極めることによって、恋する者のその恋が善へと向かうよ

うに導くのが、エロスの役割である。

以上からわかるように、プロチノスの二体のアプロディテ論は、彼の思想体系への関係から AU の論述がほとんどである。そして、その寓意的機能も十分に活用されているとは思えず、せいぜいプラトンの『饗宴』におけるトポスを参照することでプロチノス自身をプラトニズムの思潮の中に置くためであるかのような印象すら与える。

[B. フィチーノ]

フィチーノ (1433-1499) による二体のアプロディテ論は、プラトン『饗宴』の注釈書 (*Commentarium in Convivium Platonis, de Amore*——以下『愛について』と略記) の中の第 2 話第 7 章、第 6 話第 5 章、同第 7 章、同第 14 章、などにおいてその論及が見られる。しかしながら、この注釈『愛について』は、第 1 話から第 7 話までプラトン『饗宴』の展開に即して書かれているので、『饗宴』において二体のアプロディテが取り上げられているパウサニアス演説の注釈は第 2 話に当たる。したがって、本稿では第 2 話を中心に論ずることにしたい。

『愛について』の叙述のスタイルにも興味深いものがある。第 1 話第 1 章はそのプロローグとして、この書の成立の由来を、プラトン『饗宴』の冒頭部にあったのと同じようなドラマ的仕掛けで語っている。それによれば、「哲学者の父」(philosophorum pater) であるプラトンは誕生日である 10 月 7 日に、その 81 才を祝う当日に亡くなった。そこで後のプラトン派の人たちは、この日に宴を開いて師を追慕するのが常であったが、それもポルピュリオスの死後は 1200 年にわたって断絶してしまっていた。それをメディチ家の名士ロレンツォが再興を計り、1474 年と推測される [左近司, p. 244, n. 2] その日に、宴を設けてムーサイと同数の 9 名のプラトニストを招待した。食事の後、プラトン『饗宴』が朗読され、さらに列席者が分担してその内容の解説を依頼される。くじによって、『饗宴』の演説者であるパイドロス、パウサニアス、エリュクシマコス、

アリストパネス、アガトン、ソクラテスそしてアルキビアデスの計7名についてそれぞれ分担が決められ、『愛について』の各1話 (oratio) が当てられることになる。注釈もまた対話篇ふう構成するフィチーノの巧みな着想がここにある。

さて、本文に入る前に、予備知識の確認として、『愛について』においてもくりかえし論じられているフィチーノの哲学説の概略を見ておきたい。彼のプラトニズムとしての存在の段階説によれば、上位から下位へ神・天使・靈魂・自然・物体という順序をとる。神は最高の存在であり、プロチノス的な一者であり、また天使は肉体性なき知性 (mens) を表している。この上位の二つの存在は、永遠的で純粋な知性的存在を意味する。他方、性質 (qualitas) または自然・本性 (natura) とは最下層の物体に形相を与える力を持ち、物体 (materia) はたんなる延長物のことである。この下位二者は時間的制約をもった物質的な存在である。そしてまんなかの靈魂 (anima) は、中間者的存在として上位と下位とを結ぶ世界の絆の働きをする。こうした存在の階梯説のなかで、二体のアプロディテ論がどのように位置付けられているかは興味を引くところである。

形式・体裁としてはたしかにプラトン『饗宴』の注釈を意図しながら、『愛について』はすでにフィチーノの用語法、範疇語が基調をなしている。第2話もパウサニアス演説の逐語的な通釈ではなく、『饗宴』を通してのフィチーノ哲学の開陳とみなされ得る。『饗宴』の構成が各演説者の議論を対比的相互批判・止揚的に、最後にソクラテスの演説の哲学的真義を際立たせたのに対して、『愛について』ではそうした弁証法的方法はとられているようには見えず、どの章もフィチーノの思想を展開するための素材を提供しているように読める。

フィチーノの論法で注目すべきは、先に挙げた存在の階梯説にしても、各存在間の差異は固定的絶対的・種の差別的なものではなく、神からの存在の「流出」(emanatio) として連続性が認められるということであり、また、弁別的差異規定よりも比喩的・類比的同一をとらえようとするのも彼の議論の特徴で

あろう。そのいくつかの例を第2話の中から見よう。

神についてフィチーノは、プラトンを承けて「善であり美であり正義である」と規定するが、その根拠も「創造の働きゆえに善、魅了する働きゆえに美、そして各々の長所に応じて完成させるので正義」とし、「善から美が流出し (effluit)、正義をめざして流れる (profluit)」と語って、善・美・正義の連続的關係を論ずる。存在誕生の起源として、また存在は生成の後、魅惑的引力で起源に引き寄せられ、最後にその回帰が完了するので、神は始め・中間・終わりという3つの働き・局面をもち、そして実体はひとつということになる。それぞれの局面は善・美・正義という名称を与えられるが、こうして善と美の關係も提示される。[第1章]

上記の局面は、神からの発出、世界への貫徹、神への回帰、という構造であり、フィチーノはそれを一種の円運動とみなす。それを行なう力は一つのものでありながら、美 (pulchritudo)・愛 (amor)・喜悅 (voluptas) という3つの名称をもっている。神から発し世界を魅惑するゆえに美であり、世界は神の美を渴望して神へと向かわせるので愛であり、神に戻って一体化が完成するのでそれは喜悅となる。こうして美と愛、さらに喜悅とが互いに關係づけられる。[第2章]

存在の階梯は、フィチーノでは同心円の關係としてとらえられる。円の中心は万物の主たる神=善であり、そのすべての同心円は被造者=美である。その同心円は4つに分かれ、知性・靈魂・自然・物体である。神がそれぞれに入り込んで光として美の輝きを与えるのは、知性では理念 (ideas) として、靈魂では観念 (rationes) として、自然では種子 (semina) として、そして物質では形相 (forma) としてである。[第3章]

そうした構造は逆から見れば、神へと戻るのは、物体の形相は種子を通して、種子は観念を通して、そして観念は理念を通してである。この考え方はフィチーノに見られる、存在を差別の方向ではなく、諸存在に通底するものを特記することによる連続構造の思想を示している。そこで、プラトンが神を第1の

王と呼ばずに万物の王と呼んだことを解説して、第1の王とした場合の、第2の別の王と同じ一民族の王に限定することを嫌ったためだとする。[第4章]

以上のような類比的思考、存在の連続の考え方をフィチーノにおいて確認した上で、第7章で論じられている二体のアプロディテ論を検討してみよう。

『饗宴』のパウサニアスによれば、一方のアプロディテは天空 (Uranos) から母なしで生まれ天上に住むが、もう一方のアプロディテはゼウスとディオネから生まれ卑俗なこの地上に住むとされる。ところで、神話的比喩においては、プラトニズムの流れでは最高神は「ウラノス」の名で呼ばれる。たしかに、天空のイメージには、地上からの超越、地上的な物質性・感覚性から遊離しているものとしての崇高さがある。それゆえにウラノスがすべての物体の支配者であり、すべての物体に君臨する最高神とされる。

そのウラノスの子孫の系列の神話的表象にあって、アプロディテについてはフィチーノは知性のシンボルとしてのアプロディテと、靈魂のシンボルとしてのアプロディテとを区別する。この二つの分類が、AU と AP とに対応する。まず、フィチーノは言う、「知性を呼ぶとき、クロノスと呼んだりゼウスと呼んだり、またアプロディテと呼んだりする」。この場合のクロノスは、言うまでもなく「時」を表さずに「生殖」と「生成」の神である。知性の役割は「存在する」(est/essentia)、「生命を持つ」(vivit/vita)、そして「知覚を動かす・知解する」(intelligit/intelligentia) という3つの要素がある。そして、それらの存在、生命、知覚にはそれぞれクロノス、ゼウス、アプロディテが対応する。次に世界靈魂 (anima mundi) の呼び方も、同じようにクロノス、ゼウス、アプロディテの3種がある。その働きはここでも3分法で、神的なものを知覚する働き (=知性)、天空の物体を動かす働き (=運動の力)、天空と比べると劣った地上のものを生み出す働き (=生成) である。この、知性、運動、生成のそれぞれは、やはりクロノス (*)、ゼウス、アプロディテに対応される。

(*) なおクロノスの神話的系列は不明であると言えよう。プロチノスによれば「クロ

ノスは豊穡と知性のことである」(「三つの原理的なものについて」『エネアデス』V, 1, Ch. 4)。しかしその根拠はなかば俗学的語源であり、koros (豊穡) と nous (知性) とが合成されてまず koronus となり、それがつづまって kronus となったという。したがっていつのまにかクロノスは「豊穡」と「知性」の両方を意味する神となった。しかし、本質的性格とは別の次元でのこうした音韻的連想によるイメージの展開は、興味深いが、当然論理的ではない。

こうして二体のアプロディテは、ひとつは天使のうちに見られる知覚、ひとつは世界靈魂に付与されている生成力のこととなる。知性としてのアプロディテがウラノスから母なしで誕生するとはどういう意味をもつか。母=mater とは、素材となる物質=materia のことを指す。それゆえ、母なしで生まれたということは物体の素材である物質とは無縁である。したがって、AU は知性の中心となる。それは、存在の序列からいくと、天使の中心である知性・知覚・直観=intelligentia である。

次に、二つめのアプロディテ、つまり世界靈魂のうちにあるアプロディテはゼウスとディオネの娘である。ゼウスの娘であることは魂のうち、天空の物体を動かす運動能力(=ゼウス)から生まれたわけで、今度はアプロディテは地上の物を動かす運動能力を得ている。また、母ディオネの存在は、この世の素材である物質との関係を意味する。こうした運動および生成能力と物質処理能力とを持つ AP は、たしかに繁殖・豊穡のシンボルとなり得る。

以上のアプロディテ二分法は、一見すると両者を存在論的に別個のものとしているように思えるが、しかし、フィチーノの立論の興味深い点は、さらにエロス論を介して、両者の連続性を構想していることである。エロス論は以下のように展開されている。

二つのアプロディテは従者としてそれぞれ自分に似たエロスを持つ。第1のアプロディテは神の美に憧れてそれを求める。第2のアプロディテはおのれの生成力を働かして、その神の美を物体の中心に作りだそうとする。また、第1

のアプロディテは神のきらめきを自分の内に抱き取って、さらにそれを第2のアプロディテに送り出す。すると今度は第2のアプロディテはそれを受け取り世界の物質の中に注ぎ込む。そうして世界の事物はより見事に美しくなる。ここにおいて二つのアプロディテは相互の交流によって、神の美を介しての関係をうち立てることが理解されるのである。

ところで、人間の魂にも大きな知覚の力と運動・生成の力とがあり、前者は第1のアプロディテに関わり、第2のアプロディテは後者に関わる。人間がそれぞれ2種類のエロスに助けられ、まず人間の身体の美しさに目を止めた時、我々の内なる第1のアプロディテ、すなわち知性はその美しさを神の写し(imago Dei)と考えて尊崇の念を抱く。そして時には本物の神をめざして突き進むのは、すでにプラトンの『饗宴』に記されている通りである。

さらに第2のアプロディテは、神の写しを実際に作り上げることに専心する。この制作は人間の生殖行為と類比化されることができ、芸術家の創造の秘義にも関わるであろう。

このように、AUに関わる人間の営みは美の観想であり、APに関しては美の生成(generatio)である。

以上が Ficino による二体のアプロディテ解釈である。こうしてみるとアプロディテに関し、美と愛という面と、豊穰・生成・生産という面とがあることが理解できる。議論の方向としては、プラトン(パウサニアス)、プロチノスは明らかにAUを重視する方向であるのに対し、フィチーノの場合は、序列的にはAUを上位に置くものの、APを必ずしも卑下しているわけではない。むしろ両者の連続的相関関係、結びつきの緊密さが論じられているのが興味深い。それは、愛を単純に弁別した、天上的愛と人間的愛、聖愛と俗愛、人間的愛と獸的愛、靈的愛と性愛、といった区別に対する否定ないし止揚の可能性を思わせる。

REFERENCES

<プロチノス>

『プロティノス ポルピュリオス プロクロス』(世界の名著 続2)、中央公論社、昭和51年

Plotins Schriften, Übersetzt von R. Harder, Bd. 5, Felix Meiner, 1960.

Plotinus III, trans. and introduction by A.H. Armstrong, Loeb Classical Library.

Plotini Opera, ed. P. Henry et H.-R. Schwyzer, t. 1, Oxford Classical Texts, Oxford, 1964.

Plotin, *Ennéades III*, traduit par É. Bréhier, Paris: Les Belles Lettres, 1981.

<フィチーノ>

マルシーリオ・フィチーノ『恋の形而上学』、左近司祥子訳、国文社、1985

Ficino, *Commentarium Marsilii Ficini Florentini in Convivium Platonis, de Amore*, in *Opera Omnia*, 2 vols, Basileae, 1561.

Ficin, *Commentaire sur le banquet de Platon*, traduit par R. Marcel, Paris, 1956.

Ficino, *Commentary on Plato's Symposium on Love*, an English translation by Sears Jayne, Dallas (Texas), 1985.

Beierwaltes, Werner, *Marsilio Ficinos Theorie des Schönen im Kontext des Platonismus*, Heidelberg, 1980.

Chastel, André, *Marsile Ficin et l'Art*, Genève: Droz, 1975.

Kristeller, Paul Oskar, *The Philosophy of Marsilio Ficino*, trans. by V. Conant, Peter Smith, 1964.

Marcel, Raymond, *Marsile Ficin*, Paris, 1958.

Panofsky, Erwin, *Studies in Iconology*, Oxford U.P., 1939.

Wind, Edgar, *Pagan Mysteries in the Renaissance*, revised and enlarged edition, New York: The Norton Library, 1968.

[本稿は1992年度神戸女学院大学女性学インスティテュート研究助成による研究成果である。]

Summary

Two Aphrodites (2)

Masahiro Hamashita

In the tradition of Platonism noteworthy are Plotinus and Ficino in terms of the conception of two Aphrodites.

Plotinus argues in "On Eros" of the *Enneades* that Aphrodite Urania has no relationship with the idea of marriage, and that Aphrodite Pandemos is the guardian of marriage. Marriage means a vulgar custom which is far different from spiritual attitudes required of philosophers. Aphrodite Urania is regarded as a member of the Uranos family, keeping a purified spirit away from material elements. She also represents the daughter of Kronos (=intellect), which means that she is a most divine spirit which is the third in the order of Plotinus's system (God-intellect-spirit). Aphrodite Pandemos is dismissed in Plotinus's thought because of her material character. Generally, Plotinus seems not to make less use of the mythological way of thinking than Plato.

Ficino appreciates and comments on Plato's *Symposium* in his *Commentarium in Convivium Platonis, de Amore*. Aphrodite Urania and Aphrodite Pandemos correspond respectively to intellect and spirit (= anima mundi). Besides, Aphrodite Pandemos has relation, on one hand, with the power of terrestrial movement because she is a daughter of Zeus who is a mover of the celestial world, and on the other hand, also with the material world because she was born as a daughter of Dione. These two relations in Aphrodite Pandemos's character suggest her status as a symbol of prolificity. Thus two Aphrodites have their position in Ficino's

hierarchy of being: God–angel (= intellect)–spirit (= anima)–nature– material. Supporting the work by Eros, Aphrodite Urania perceives beauty as the image of God and Aphrodite Pandemos tries to reproduce that image. Ficino seems not to discriminate definitely between the two Aphrodites because his concept of successive emanation of being implies that their difference is not in their ontological kind but in their ontological degree. So his idea of two Aphrodites may overcome the opposition between celestial love and terrestrial love, sacred love and profane love, spiritual love and sexual love, and between beauty and fertility.